

長柄橋 (人柱伝説雑考)

田中清*

1. 長柄橋

枕草子に「橋はあさむつの橋、長柄の橋、……」とみえ古歌にも多く読まれ、長柄橋ほど古くから有名な橋もまたとあるまい。この橋はわが国最初の大橋として、孝徳天皇(645~654年)難波豊崎宮を営まれたとき、御津浦(難波江)の島々に架けられた長さ1里にわたる橋々の総称といわれ、日本後紀に嵯峨天皇弘仁3年(812年)6月3日使を遣わし摂津国の長柄橋を造らしむとある。続いて文徳天皇実録に仁寿3年(853年)10月11日摂津国より奏す、長柄と三国の河河近年橋梁断絶し人馬通ぜず、堀江に準じて2隻の船を置き渡を通せんことを請う、これが許さるとあり、長柄橋は間もなく流失し長く渡しとして、歌枕に名残りを留めたに過ぎなかった。

古今集：世の中にふりぬるものは津の国の、

長柄の橋と我となりけり(読み人知らず)、
難波なる長柄の橋もつくるなり、
今は我身をなににたとへん(伊勢)、

拾遺集：葦間より見ゆる長柄の橋柱、

昔の跡のしるしなりけり(藤原清忠)、

新古今：年経れば朽ちこそまされ橋柱、

昔長柄の名だに変わらで(忠岑)、
春の日の長柄の浜に船とめて、
いづれか橋と問へど答へぬ(惠慶法師)、
朽ちにける長柄の橋をきてみれば、
葦の枯葉に秋風ぞ吹く(後徳大寺左大臣)、

そのほか続後撰集・続後拾遺集・玉葉集・新拾遺集等にも多く読まれ、また栄花物語・明月記・住吉詣記等にその名があげられ、摂津志や摂津名所図会にくわしく述べられている。その遺跡と称するものは、

(1) 北中島・蒲田の大願寺に橋柱の木片にて作られたと称する地蔵尊あって、これは人柱になった岩氏の冥福を祈るために刻まれたものという、

(2) 西中島・山口の崇禪寺に橋杭の木片というもの、

(3) 豊崎・北長柄の光明寺にも橋杭の木片というものあり、また

(4) 豊里・上長柄の橋寺は、橋がここから河内国北河内郡橋波村または三郷村西橋波に架せられていた橋跡であるという。

いまの長柄橋とは関係がない。何といても長柄橋を有名ならしめたものは人柱伝説の元祖としてであって、和漢三才図会・撰陽群談、雅俗随筆等に物語られている。

この人柱伝説は2部よりなり、その前段では、嵯峨天皇の弘仁3年6月長柄橋が難工し、神の託宣により人柱を立てることになった。その人選に苦しみ、垂水に關を

設け通行人を捕えんとした。通りがかった垂水里の長者岩氏が、「浅黄の袴のまちに白の横つぎのある者を捕えて人柱にすれば成功する」と言ったので、皆が袴を調べてみると言い出した岩氏自身の袴がこれに当り、人柱にされてしまった。後段ではその娘光照前が河内の禁野に嫁いだが、唾のように口をきかず親元に送り届される途すがら、雉子躰の葦原の繁みで雉子が鳴き、夫が矢を放つと、娘は思わず「物言わじ父は長柄の人柱、鳴かずば雉も射たれざらまし」と歌ったので連れもどされた。娘は尼となって山崎の不言寺にいたが、後に旅に出て行方知れずとなったという。

この人柱伝説は平安中期にはすでに人に知られ、早くから地を離れ昔話となって都々浦々に遊行していたらしい。あるいは摂津の長柄自体が借り物かもしれない。長柄(長良)は「長ら」・「流ら」で長いものすなわち川の意であって、その地名は全国に約30カ所もあり、ことに近畿から裏日本と美濃・尾張にかけて多い。

2. 長柄人柱系伝説の例

古い土木工事ことに水に関する工事について民間伝承を調べていると人柱伝説に出会うことが多く、それら各地の人柱伝説はいちじらしい類似性を持ち、固有名詞を除けば全く同一のことも少なくない。築堤等に関する人柱伝説を追ってみると、利根川権現堂の巡礼曲輪、狩野川の江間堤、富士川の備前道丁等のように今日でも治水の要点と思われるところや、北上川沿岸や印旛沼周辺のように過去における河川の変遷の跡をたどる資料となるものも少なくないので、一顧の価値はありそうだ。また古代水文思想を追求する上からは逸すことはできない。

すでに述べたように長柄人柱説話の前段では人柱の提言者自身が人柱となり、また袴や着物のつぎによって自発的暗示をする。長者や袴は人柱に一定の資格を要することの名残りであり、浅黄の袴は神人を表わしている。後段では人柱に父と娘の2人が関係することを暗示しており、唾のような娘が「鳴かずば雉も射たれまいに」と歌う話は他からの借り物らしい。この系統に属する各地の伝説はいちじらしい類似をみせているが、後段を欠くものも多い。前段と後段が揃い長柄人柱説話と全く同一形式のものは、

(1) 摂津国西成郡長柄橋……既述、

(2) 信濃国小県郡長良橋……全く同一、

(3) 大和国南葛城郡吐田郷村名柄橋……全く同一、

* 正員 工博 大阪大学教授、工学部構築工学科

(4) 紀伊国那賀郡中貴志村および東貴志村長柄橋……ほぼ同一、

(5) 安芸国御調郡久井村……池の堤に 42 才の男が人柱になるが、その提案は羽織が水に沈む者となっている、

(6) 安芸国安芸郡昭和村……川の堤に吉松という男が人柱になるが、他は同じ、

(7) 肥前国南高東郡千々岩町……防波堤の人柱、同一、

(8) 肥後国山鹿市……川どもの人柱にフセ女が人柱となるが、他は同一、

(9) 鹿児島・大島郡笠利村……土堤に女が人柱となる。後段を欠き、提言者自身が人柱となるものでは、

(10) 北伊豆・狩野川川間堤……築堤に六部が人柱、

(11) 紀伊国西牟婁郡岩田村彦五郎堤……彦が提言し彦と五郎の 2 人が該当し 2 人とも人柱にされる。

(12) 出雲国松江の松江大橋……橋杭に源助が人柱、変形せられたものでは、

(13) 陸中・稗貫郡湯口村長良川の橋……代官の妻が間男をし夫を亡くさんものと夫の袴に横つぎをして人柱にさせるが、その妻も一緒に人柱にされる、

(14) 信濃国水上内と更級郡の境の久米路橋……貧乏人が庄屋の家から小豆を盗み娘に赤飯を食べさせたが、娘の口から露れて人柱にされる。娘お菊は口をきかなくなり後段は同じ、

(15) 肥前・壱岐郡初山村新田堤……築堤の人柱の代りに絵姿を入れることになったが、絵姿を取られた者は早死するといわれ、横切れのふせのある者が選ばれた、後段はない、

(16) 武蔵国利根川の会の川締切……須加の人または羽黒の行者が自ら進んで人柱になったというだけで説話は消失。

3. 身代り人柱伝説の例

人柱に身代りの現われる伝説は多いが、その多くは他の系統の説話と結合している。単純な例では、

(1) 兵庫の築島……平清盛兵庫の港を築くとき阿波民部重能を奉行として築島に 30 人の人柱を立てんとす。従者松王身代りとなって 1 人人柱に立つ。来迎寺(築島寺)に松王の木像というものがある。平家物語には人柱の代りに石に一切経を書いて築いたので経ヶ島というところあり、舞の「築島」では名月姫の物語になっている。讃岐国香川郡円座村広幡神社では松王の父を讃岐河辺郷の河辺民部として松王健児を祀り、伊予国上浮穴郡白杵の三島神社では松王の父田井民部が伊予に移り住んだといって田井大明神を祀っている。柳田「妹の力」によれば、松は「仕る」・「祭る」であり、王はミコで神の子を意味し神人であるとしている。

(2) 駿河国富士郡加島村富士川の備前道丁……今から約 350 年前富士川が水神の森廻りではんらんし、堤の人柱のくじに家老が当たった。通りがかりの六部が自ら進んで人柱の身代りとなり、かねを叩きながら生理にされた。

4. 女の人柱伝説の例

この系統の人柱にはオナリ系人身御供と同一説話形式のものが多い。各地にある女堤や比丘尼堤・巡礼堤には人柱伝説が聞かれる。

(1) 陸中・釜米郡の若狭土手……北上川の築堤の人柱に、彦惣長者の婢お鶴が昼飯を運んできたのを捕えて沈めたといひ、お鶴明神がある。お鶴は南部の生れとか駿河から買ってきた女ともいう。

(2) 陸中・釜米郡浅水村の白鳥沼……この沼は北上川の古川跡といわれ、人柱お鶴を祀る白鳥明神がある。

(3) 陸中・金ヶ崎村の千貫堤……天和年間(1681~1684 年)堤の横穴の奥に仏像を置き女達に代る代る礼拝させ、最後に穴に入った女を生理にした。女は釜石の浜から買われてきたという。

(4) 東上総・長生郡上陸村上の郷の尾長堰……女乞食オナを捕えて人柱にした。女の食べかけの梅の実から片側肉の梅の木が生えたという。オナは女で、尾長堰は女ヶ堰である。

(5) 越中国射水郡下村の女堤……女が自ら進んで人柱になったという。

(6) 伊予国東宇和郡多田村の関地の池……池の堤の人柱にオセキがなる。

(7) 筑後国三井郡床島の堰……享保 5 年(1720 年)堰の人柱に、吉兵衛貧のため娘を売り、オサヨ 9 才が俵につめられて水底に沈められた。後に白髪の老人が娘の屍を引き上げて蘇生させたという。この白髪老人は洪水伝説に現われる水の神ではなくキリシタンパテレンらしい。

5. 母子人柱系伝説の例

母と子の 2 人が人柱にされる哀れな伝説も多く、これは母子神の流れを汲むものとされている。

(1) 豊前国下毛郡藍原村の相原神社(鶴市神社)……山国川に沿った沖代千町は宇佐八幡の神領で 7 人の地頭が支配していた。崇徳天皇の保延 1 年(1135 年)8 月 15 日に洪水で切れた高瀬川の大井手(堰)の工事に人柱を立てることになり、地頭湯屋弾正基信の提案で水に袴を投げて沈んだ者が人柱になることになった。湯屋弾正の袴に銭が入ってあって沈み自分が人柱に立つはめになった(長柄橋型)。そのとき家臣古野源兵衛重定の娘鶴 35 才(弾正の侍妾とも下女奉公の子持後家ともいう)とその子市太郎 13 才とが自ら進んで身代りとなり人柱に立

った。ツルはマツと同じくマツルであり、イチはイチコ・イタコでともに巫女の意であろう。人柱にはツルの名が多い。

(2) 陸中・雫石川と中津川の間の杉土手……堤が切れ山伏の言で酉年酉の日に生れた処女を人柱に立てることになり、地頭佐藤の娘小糸がこれに当たった。たまたま佐藤の家に泊った母子巡礼の娘が酉年酉の日生れて身代りとなって人柱に立ち、母も悲しみて身を投げて死ぬ。

(3) 武蔵国北葛飾郡幸手町の巡礼曲輪……享和2年(1802年)6月利根川の洪水で旧権現堂川の堤が切れ、その築堤に通りがかりの巡礼母子を人柱とした。巡礼供養塔がある。

(4) 武蔵国北葛飾郡栗橋町の一言の宮……昔利根川の堤はこの辺りにあり、築堤に通りがかった巡礼母子を捕えて人柱とした。投げ込まれるときに女が一言だけ叫んだという。一言は託宣であろう。

(5) 下総国印旛郡大竹村松崎の坂田池の堤……坂田池の雄大蛇が長沼の雌大蛇のもとに通うので毎年秋になると東側の堤が切れた。その築堤に通りがかった母子巡礼を人柱にした。背に負っていた女の子が食いさした梅の実から片端の梅の木が生えるようになった。

形式は異なるが夫婦2人の人柱伝説は、前に述べた陸中裨貫郡湯口村の例とか陸中松崎村の男が白馬に乗って沼の人柱となり、その妻が後を追って入水した伝説もある。

6. 築城人柱伝説

城には怪談や人柱伝説がつきまとっている。それらは発生が新しく作爲的要素が多いが、中には古い伝承が築城に結びつけられたものもみられる。

(1) 陸奥・多賀城……昔多賀城にほど近い石堂に白萩という美しい夷人の娘がいた。城普請の役人が言い寄って拒絶され、その腹いせに娘の父を城の人柱に指名した。父を人柱に取られた娘と母は悲しみ城を呪って死んでしまった。その地を母子沢という。

(2) 会津猪苗代城(亀ヶ城)……亀姫を人柱にしたという。会津若松城を鶴ヶ城というが、中世から出城に鶴丸・亀丸とつけたり、城名にも鶴城・亀城のつくものが多く、猪苗代城跡の礎石は亀形が刻んである。

(3) 江戸城(千代田城)……人柱伝説はなかったが関東大震災に壊れた石垣の修復したとき、二重櫓の地下から手を合わせた白骨8体が現われ人柱とみられている。

(4) 美濃郡上八幡城……永禄2年(1559年)遠藤盛数築城のとき、美少女オヨシ自ら進んで人柱となる。

(5) 美濃大垣城(巨鹿城)……天正18年(1590年)伊藤祐盛築城のとき、老山伏を人柱とする。

(6) 大阪城……甲子夜話の山伏の怪は人柱か。

(7) 紀伊和歌山城(竹垣城・虎伏城)……娘お虎を人

柱にしたといい、また山の形虎の伏するに似たるをもつて名付け、虎にちなんで竹垣とつけたともいう。

(8) 幡磨姫路城(白鷺城)……貴女長壁姫も人柱の靈か。慶長14年(1609年)池田輝政改修の後棟梁桜井源兵衛等を人柱にし埋門に生理めしたという。

(9) 越前丸岡城(霞ヶ城)……天正4年(1576年)柴田勝豊築城のとき、片眼の若後家お静、2人の子を待に取り立てる約束で人柱となったが、この約束が守られなかったのでお静の亡霊が出たという。

(10) 安芸郡山城……築城のとき毛利元就人柱を止め、石に「百万一心」と刻んで埋めた。

(11) 因幡鳥取城(久松城)……慶長7年(1602年)池田長吉城拡張のとき、侍女おさき人柱となる。

(12) 伯耆米子城(久米城)……慶長6年(1601年)中村一忠城修築のとき、糺の杜の盆踊りの中から美少女久米をさらってきて人柱にしたという。一説には88才の翁が男の子をもうけ、その久米仙人のごとき精力絶倫にあやかって久米城と名付けたともいう。

(13) 出雲松江城(千鳥城)……慶長12年(1607年)堀尾吉晴築城のとき、「東北」を謡いながら普門院の前を通りがかった娘を捕えて人柱とし、その亡霊が出たという。一説では二の丸で盆踊りを催し、その中から美しい娘をさらって人柱にしたともいい、また尺八を吹いて通りがかった老虚無僧を人柱にしたともいう。

(14) 讃岐丸亀城……慶長7年生駒親正のとき、城の石垣に登った石工羽坂重三郎を井戸底に石詰めにした。

(15) 伊予大洲城(比地城・お亀城)……美しい孤娘オヒチまたはカメを人柱にしたという。

(16) 肥後熊本城(銀杏城)……慶長6年加藤清正築城のとき、大力の横手五郎を井戸底に生理めにした。

(17) 豊後大分城(荷揚城)……慶長2年(1597年)福原直高築城のとき、盲目の母をかかえた貧しい娘お宮18才が自ら進んで人柱となり生牛とともに生理され、母も悲しみて死んだという。

(18) 豊後日出城……34年道路工事中、南西隅の城壁の下から木棺に入った老人の白骨とまげが現われ、約360年前木下延俊築城のおりの人柱と推定された。

(19) 肥前島原城……キリシタン悲史や多くの伝説を持ち、大女の怪も人柱に関係があるといわれる。

7. 人身御供説話の類型

人柱伝説は人身御供の説話と密接な関係があり、その多くは昔話形式になっている。記紀神話にも人柱説話として仁徳天皇の淡田堤があり、人身御供説話ではスサノオの尊の八岐大蛇退治における奇稻田姫や日本武尊東征におけるオトタチバナ姫はあまりにも有名である。

生贄説話は古くから文献にもみえ今昔物語や宇治拾遺物語にも載っている。祭りの中にも人身御供の名残りと

されるものがあり、陸中稗貫郡宮野目村諏訪神社が毎年乙女を生贄にした話や尾張国府宮の難追祭(直会祭、旧1月13日)と三河国宝飯郡小坂井町の龜足神社の風祭(4月10日)では昔旅人の子女を捕えて生贄にした話があり今昔物語や宇治拾遺にも出ている。祭りの稚児も人身御供で神の依代とされ幡磨養父郡建谷村船谷の祭りでは稚児の葬列がある。

人身御供説話を典型的に分けてみると、

(1) 大蛇変身説話

女が沼や淵に入って大蛇に変身したり、禁断の魚を食べて喉が渴き水を飲むほどに大蛇に変身するという昔話や伝説は全国的に多い。後者はことに東北地方に多く十和田伝説や田沢湖伝説もこの系統である。この説話は水の神である沼の主の大蛇も死者の霊魂から説明しようとする一過程で、その裏には人身御供の習俗がひそんでいる。この説話はいろいろに発展し、水底姫型昔話もこれに属しよう。その発展した代表が松浦佐用姫伝説である。

a) 陸中胆沢郡 北葉場を中心として展開され、掃部長者の妻が禁断のフナを食べ水を飲むほどに大蛇に変身し沼の主となり毎年美しき処女を人身御供に取るようになる。ある年郡司兵衛義実(右衛門尉ともいう)の娘がこれに当り、身代りを求め京より遊女お小夜(佐用)を人買して人身御供とする。さよの護持仏の功力により大蛇は得脱昇天し娘は助かる。さよは肥前松浦の生まれとある。

b) 陸中伊賀郡更木村 女主の掃部長者が鮭を食べて水を飲み大蛇となる。その沼の主の人身御供に六部の娘さまがなるが、さよの誦誦するお経の功力で得脱し、大蛇はもとの女長者にもどる。

c) 岩代安積郡浅香沼 浅香玄蕃が主人の娘に横恋慕して娘を沼に投げ殺す。その怨霊が大蛇となり毎年3月24日に二八の生娘を贄にとり、その33人目に片平村の権賀太夫の娘が当る。身代りを人買して、大和坪坂の松浦金任の娘佐用姫を贄とした。姫の誦誦する提婆品経の功力により大蛇は解脱成仏し、姫は助かり大和に帰って狭手彦の妻となったという。

d) 肥前唐津の松浦 宣化天皇2年(537年)狭手彦任那に渡るとき、松浦長者の娘佐用姫恋いて後を追いつ領布振山に登りて領布を振り、さらに船を追って加部島に至り悲しみの余り望夫石に化したという。万葉集に筑前の国司山上億良が「遠つ人松浦佐用比売夫恋ひに、領布振りしよおへる山の名」と読んでいる。肥前風土記(713年)では狭手彦の思い者篠原の弟日姫子に留守中怪しい男が通ってきた。男の袖に糸をつけて後を追うと沼の大蛇であり姫子も沼に入るという三輪山型おだまき伝説となっている。

e) 幡磨国佐与郡 幡磨風土記に佐与姫が佐提彦を恋いて東に下る途中この地に死すとある。

松浦佐用姫説話は古くから知られ、変形されて広く各地に分布しているが、その周辺に化粧坂や化粧水・化粧井等の跡をともっており、人身御供説話に属している。

(2) 大蛇掣入説話

大蛇が男に化けて娘を嫁にし、娘が沼に入ったり、大蛇を退治したり、蛇の子を生む昔話は各地に多く、これ

は水の神への人身御供の変形であろう。

a) おだまき型大蛇掣入昔話 娘のもとに夜な夜な通う素性の知れぬ男があり、男の着物に糸をつけて追って行くと沼の主の大蛇であったというもので、その代表は三輪山神話であり、古代結婚形式の一とされるが、田の神への人身御供儀礼にも関係があると思われる。

b) 水乞型大蛇掣入昔話 旱天に父が田に水を引いてくれる者があれば娘を嫁にやろうという。沼の主の大蛇が田に水を引き約束通り娘を取りにくる。この昔話は他の昔話と結合しているように発展する。文徳天皇実録に美濃国安八郡の安八太夫(藤高房)の娘が早ぼつに水を与えた札に大蛇に取りられる話が出ている。

c) 蛙または蟹の報恩昔話 父が蛙または蟹を助ける。その娘が沼の主へ人身御供となったとき蛙または蟹が出てきて大蛇を退治して娘を助ける。

これらの昔話ではつねに父と娘が関係している。

(3) オナリ殺し型・嫁殺し田型伝説

a) 越中国射水郡樺田村沖田 沼の主の大蛇が田植の乙女を呑むと、その乙女の櫛が大蛇に刺って退治される。

b) 羽後秋田郡 王大夫惟秀の婢オトメ18才が田人に屋敷を運ぶ途中、地蔵堂に雨宿りして飯つづを地蔵に供えた。田人は飯の疵をとがめ、主人がオトメの顔に焼いた矢の根をつけて殺すが地蔵が身代りする。

c) 信濃国更級郡更町村三水の嫁殺し池 姑が嫁いじめして、1日で田植を命ぜられた嫁は疲れ果てて田で死ぬ。田は池に変わったという。これと同じ話は、駿河安信郡の北安東や掛川等にもあり、オナリ田・嫁ケ田・嫁殺し田・死田・死人田等というのが全国的に分布している。姑は長者の変化であり、姑の嫁いじめは近世封建社会の産物である。富士郡須村ではおきくが1日に田植を終りかねて死んだという。

d) 下総国印旛郡八生村松崎の千把が池 腕違者のおつらが千把の苗を1日で田植し、慢心して股の間から夕日を覗く。女は天罰でその場に死に田は池に変わる。この話は出雲湖山の長者伝説等の長者の夕日招き戻し伝説に通じている。

(4) 母子殺し型伝説

この型のものは母子人柱伝説と著しく類似している。

a) 陸前名取郡の小鶴の池 長者の婢小鶴が千刈田を1日で田植するように命ぜられ、背負ったわが子に乳を飲せる暇もなく、子が死に母も悲しみの余り死ぬ。

b) 下総国印旛郡印旛沼の師戸の金昆羅淵 船尾の喜右衛門の家の子守安が田人に運ぶ屋敷を背負籠に入れ、その上に子を載せて行くと、田人が汚いといって屋敷を田に捨ててしまった。子守女は主人に叱られることを怖れ、子を背負ったまま師戸の金昆羅淵に身を投げて死ぬ。背の子が食べさしていたシドメから片割シドメが生えるようになった。この宗像神社の祭りは7月13日。

c) 下野国足利郡五十部の水使神社 安永7年(1778年)長者五十部小太郎の婢が田植の屋敷を運んでいる間に、その子が主人に殺され、女は悲しみ狂って淵に身を投げて死ぬ。水使神社に飯櫃と飯杓子を持った女の木像がある。

(5) 猿神退治昔話

この型の昔話は古くから広く知られ、今昔物語26巻に美作国で生贄を取る中参高野という猿神を東国の獵師が犬を連れて退治する話と飛騨国の生贄を取る猿神を僧が退治する話とが出ており、宇治拾遺物語にも美作国の

中ざんかうや退治の話が再録されている。中参は猿、高野は大蛇であって、これは山の神を表わしている。

この系統の説話は全国的に分布し、その数も多く、北は青森・岩手から南は熊本・鹿児島まで数十話が採集されており、代表的のものを二、三あげておく。

a) 信濃国上伊那郡赤穂村光前寺 遠州磐田郡見付の矢奈比売天神（信濃の伏見天神としたものもある）では毎年秋祭に美しい処女を人身御供に捧げねばならなかった。もし怠れば大暴風雨が起こったり五穀が実のらなかつたりした。あるとき六部（神人ともいう）がこの里にきて禊で様子をうかがうと生贄を前に怪物が「このことばかりは信州信濃の光前寺、兵坊太郎に知らせるな」と歌い踊っている。六部は光前寺の兵坊太郎（早太郎ともいう）という犬を連れてきて、翌年人身御供の身代りになって犬とともに猿神を退治する。これが犬塚由来とある。

b) 肥後国玉名郡高瀬の伊倉八幡 裏裏の八幡が荒れて人身御供を取り、処女を練達の奇習で送る。六部が肥前の犬を連れてきて猿神を退治する。これが犬業師の由来とある。

この型の説話は変化が多く、六部や僧・神官等がいろいろ面白い名の犬を連れてきて猿神を退治するが、猿神の代りに貉・狸・猫・蜘蛛等になったものや武士の武勇談に仕立てたもの、かくれ里昔話と結合し現世を離れたものなど種類が多い。近世怪談にも一役買っている。

8. 殉 死

殉死は人身御供の特種のもので、古代殉死においては死者に供してあの世で奉仕するものであり、世界中にあったもので、中国の殷墟の玉墓には随葬者が数百人に達する大規模な殉死が発掘されており、漢代まで続いた。わが国の古代殉死は幡唐国風土記の昭和の里の条に、大長谷天皇（雄略天皇）のとき長日子の婢と馬を殉葬したことが出ている。日本書紀に垂仁天皇 28 年 10 月天皇の弟倭彦命薨じ、11 月ムサノツキ坂に葬るとき近習せる者たちを生理にし、その泣吟が数日続いて死んだとあり、天皇その悲慘を聞くに忍びず 32 年皇后日葉酢媛命の薨するに当り、野見宿禰の進言により出雲国の土部に埴輪を造らせて殉死に代えたとある。実際は埴輪はもっと後世に現われてきたものでこの有名な話は単なる伝説ではあるが殉死習俗の一端はみられよう。孝徳天皇大化 2 年（646 年）3 月大化改新に当り葬墓の制を定め殉死を禁止し、この禁を犯せば罪一族におよぶしたのでこの旧俗を断つたとある。その文から殉死は自ら縊死するか他から絞殺したものであろう。

近世殉死は意義を異にし、戦場において主君と共に討死する盟約の平時への拡張とされ、戦時殉死には古く雄略天皇のとき新羅遠征において大伴談連の戦死に從者大伴津麻呂が殉じたのを初めとして、北条高時の滅亡、楠木正成の湊川戦死のとき等その例は多い。近世武士社会の殉死の始まりは明らかでないが、永正 5 年（1508 年）2 月 15 日島津忠昌の死に奈良原助八が殉じており、後では慶長 12 年（1607 年）名古屋城主松平忠吉の死に家臣 3 人が殉じ、このころより武士の道徳として追腹が盛んとなり、慶安 4 年（1651 年）4 月 3 代将軍家光の死に大老堀田正盛が殉じたのを絶頂とし、追腹は慣例的になり義理強制の弊や遺族厚遇を条件とした商腹まで生じ、寛文 2 年（1662 年）紀州徳川家で追腹を禁止したのをきっかけに翌寛文 3 年に幕府は殉死禁令を出した。その後寛文 8 年（1668 年）宇都宮城主奥平忠昌の死に追腹したものがあ幕府は厳罰に処し、さらに天和 2 年（1682 年）武家法度に殉死禁止を明文し、その風習はなく

なった。乃木大将の殉死は最近の例である。

9. 人柱伝説発生地の基盤

各地の人柱伝説は人身御供説話と関連し相互にいちじらしい類似性を持っている。これらは各地で独立した伝説の形式をとっているかに見えるが、類型的な昔話の共通要素から構成され、遊行の神人や巫女、後には六部・巡礼・座頭・警女・琵琶法師・商人等によって持ち運ばれ伝播せしめられたことは疑うべくもない。しかし彼等の営みも一つの説話を各地に移植したのではなく、各地で古くから培われてきた伝承を類型的な一定の型わくに鋳こんだに過ぎないのであって、そこにはわが民族の根本的な習俗や信仰に由来する基盤があり、米作に対する農耕儀礼と古代水文思想とがひそんでいる。これらはインド・中国・朝鮮からヨーロッパにも広く分布している人柱伝説と比較検討する必要がある。

人身御供は生贄の一種で自由母権制農耕文化、わが国では弥生式時代に起こった習俗であり、人の生身を儀礼的に殺害し神霊に供進する宗教的行為であって、神の食物としてまた神への奉仕者として献じ、神霊を慰め喜ばせまたその怒りを静めんとするものであって、代償として神霊の加護・神秘的な生命力や呪力を獲得せんとし、また罪を贖うことを願うこともある。犠牲の霊魂を肉体から解放し神の役に供したり、神への伝言を託したり、人間は神のものとしてこれを神に返す考えや犠牲を共食し、その血を吸い合って神との融合をはかる考えもある。

水の神の怒りは洪水・旱ばつとなって現われ原始農耕に餓死をもたらした。海神の怒りは暴風高波となって船を覆した。この非常のとき神の怒りを静めるには人身御供を捧げねばならなかった。地の神の怒りは建物や橋、溜池や河川の堤・堰（井手）を破壊した。これらを強化するには人身御供によって人身の持つ霊質を柱や礎石に転移せしむる必要があり、人柱を生理にし、柱や礎石に生血を注いだり塗ったりした。水の神の怒りを静め罪を贖うには、生贄に土地・水利の支配者自身がならねばならなかった。これによって神と結ばれ一族に土地・水利の支配権が確保せられた。この生贄の資格は次第に家族・眷族・奴隷・捕虜・罪人と下落し、通りがかりの他郷人や旅人がねらわれるようになる。そして遊行の巫女・巡礼・六部・行者・僧・神人等と宗教的に結びついた。水の神は沼の主の大蛇として表わされ、田の神も穀神ヲカのように蛇神であり、ともに竜蛇神たる雷神から分派したものらしく、水の神が田の神と結合すると、水の神も人身御供に美しい処女を要求するようになり、人柱伝説にオナリ殺し説話が混ってくる。人の死は霊魂が肉体から遊離する。人の禍福や天災地妖は霊魂の支配するところとする素朴な宗教は、沼の主の大蛇も死者の霊

魂でなければならなかった。御霊信仰からは、人身御供のような不慮の死の遺憤にもとづく怨霊の所為こそ最も怖るべきであり、御霊統御としての八幡信仰や天神信仰が人柱伝説に介入してくる。人智が進むに従って人身御供をとる神を疑い、これを試み、退治してしまう。勇者・高僧により、さらに仏教の影響によって護持仏や経まで加わって大蛇退治となってくる。和氣清麻呂が河伯を否定し人身御供を止めようとしているのを見ると、このころまだ行なわれていたのであろうか。建物や築堤の人柱も、柱や礎石に人の像や面を彫刻したり、石にお経を書いて代置するようになった。水の神への人柱と田の神への人身御供とは本質的に異なっており、前者は必要に応じて不定期に捧げられ、初めは資格があったが後には老幼男女を問わないが、後者では毎年春か秋に定期的に捧げられ、美しい処女に限られたようである。

米の成育を田の神の生殖力とし、穀物の繁茂凋萎を農神の去来と観じ、田植には田の神を招ぎ齊き、田の神たる大蛇と美しい処女との結合が必要であり儀礼的わざおぎが営まれた。ここに神話や大蛇算入昔話が生まれてくる。田の神と率寝る神の妻は、依代として聖化され神の力が転移している。この人身御供の処女を殺し肉や血を田畑に埋めることによって農耕儀礼は完成される。記紀神話にはササノオの尊の穀神殺し神話がある。田植には植女と呼ぶ一般の女とオナリと称する化粧した特定の女とがある。オナリは養女と書き母成・宇成とか昼飯持ともいい、田植に昼飯を調えたり運んだりする女で、元来は田の神に奉仕する神の妻であって、人身御供として農耕儀礼の中心であった。オナリは田の神に食物を供するのであるが、田人が田の神と共食することによって神と融合する。わが国では昼食は中世以後の風習であり、それ以前には昼飯といえば田植儀礼に限られていた。この田植儀礼は特定の神聖な三角田や塚のある田で特定の1日の間に遂行されねばならなかった。これが忌田・嫁殺し田・死人田となり、夕日招き戻し昔話を生むようになる。

その年の人身御供に選ばれた美しい処女の家には白い幣束や白羽の矢が立てられ、娘は白装束に、紅・鉄漿・白粉で化粧し、また面をつけて常人と区別せられた。櫛は人身御供の象徴であり護身の呪物であった。狩猟時代に生贄の動物を串に刺して神に捧げた名残りでもあろうか。八岐大蛇退治ではササノオの尊が奇(櫛)稲田姫を櫛に変えたとある。嫁殺し田の嫁は好女で美しく化粧した人身御供であるが、転じて婚礼の化粧をした女、さらに若い妻となったという。花嫁姿には人身御供の名残がある。松浦佐用姫の松浦は松・鶴と同じく「任ら・祭ら」であろうが、佐用姫の方は柳田「妹の力」にあるような壘の神(後の道祖神)のサへから転じたのではなく、美称のサと好姫が結合したもので好女と同じ化粧

した人身御供の乙女の義であろう。オナリの白装束と区別するために一般の田植女は赤い腰巻をしたらしい。赤い腰巻は魔除け災厄除けの呪物として屋根の上で振ったり、桜島古里のように窓に吊って船出の客の無事を祈る奇習もある。

田の神は淵のような清き水辺や井手(用水の取入口)から出現する。神話や伝説は水辺に生まれる。神の依代として農耕儀礼を司祭し、わざおぎを営み人身御供を殺害する者は誰であらうか。その司祭者は氏族の首長であり、土地・水利の支配者自身でなければならない。延暦17年(798年)10月11日の太政官符に「出雲国造、神事につけて多くの百姓を娶り妾となすを禁ず」とあるのはこの辺の消息をうかがわせ、初夜権とも関係がありそうだ。豊作を予祝する田遊び神事や粟系の祭り等にも古いわざおぎの名残りを感じる。愛知県小牧市味岡の田原神社の豊作祭(3月15日)は俗にへのこ祭りとして露骨であった。これらは道祖神系とされているが、アガタには上田・我が田の意もあるようだ。九州の肥前肥後に聞く父が娘を殺して死ぬ醜態な伝説は壘の神系統とされているが、むしろ田植儀礼との関係が深いようだ。人柱伝説にも父と娘の結びつきがみられる。父は長者の変化でもあろうか。

人身御供が形式化されその殺害が止んで祭りに進むと人身御供の処女は巫女に変わり、司祭は土地・水利の支配者の手から離れて神主・神人に移り儀礼は転業化せられる。祭祀儀礼による神父人母の神秘的な懐胎は神の子・御子を生み、雷神童子や水神童子が現われ、三輪山神話や賀茂神話を導き、母子神の素地を作る。神の子を神に返すために初生児を水中・山中に投棄する習俗もみられ、これにともなって水辺や山中から子供を授る説話やその子が常人と異なる能力を持っていて英雄や高僧になる伝説ともなり、人文(人聞)祖神や道場法師の伝説にまで延びる。水から桃太郎、山から金太郎も現われ、河童も河太郎であって決して次郎や三郎ではない。豊作を祈って田植に妊婦や子連れ女を働かせたり、田の畔に子供を遊ばせたりする習俗もあり、村の神様はみんな子供と遊ぶことが大好きである。ここにも母子神の素地がある。人柱伝説にも母子連れが多い。

御子は神の血筋として祭祀儀礼を職業的に司るようになり、巫女・王(神人)の系列ができ、司霊者として神と人との仲介となり託宣やト占を業とするようになった。巫女は元来神の妻であった人身御供の転化したものであり、人柱伝説の伝播に介在するのは当然であった。

毎年収穫を祝う秋祭には田の神は山に帰って行き、冬は山の神となる。収穫を感謝し田の神を慰めその地に留ることを願いまた翌年再びおとずれを約束してもらうために、美しい乙女を人身御供に捧げねばならない。九州や和歌山の河童は冬になると山に行くと山童になる。猿

神は山の神である。秋になると田の神は猿神になって人身御供を要求する。そのうちに六部や神人、猟師が山の神の犬を連れてきて猿神追治をする。狼系山の神の犬は狩猟の神で猿神とは仲が悪い。

10. 結 び

人柱伝説が古代実際に行なわれたかどうかを論じてみ

ても仕方のないことである。それらを分析し共通の構成要素から、これらの説話が肯定されてきた古代の習俗や信仰特にその裏にある古代水文思想を追求してみたかったのである。

今までに知られていない人柱伝説も各地に多いことであろう。人柱伝説をお知りの方々にぜひご報告をお願いしたいものである。
(原稿受付：1960.10.21)

豆 知 識

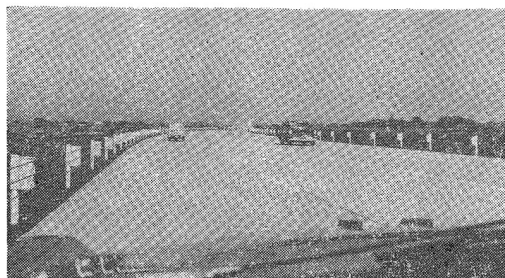
ガード フェンスとしてのガード ケーブル

道路輸送需要の急速なる伸張と平行して、トラックや乗用車等も逐次大型化の傾向をたどり、かつスピードの増加と交通量の増大のために、ガード フェンス（防護柵）をつけた道路の設計が非常に重要な問題となってきた。従来より設置されていたコンクリート柱、石柱、木柱、鉄製パイプ、金網、木板、レール等による コマ止工と称せられていた程度のもものでは、車両重量の増大とスピードの増加にはあまりにも脆弱に過ぎるか、または堅牢すぎて、自動車の事故防止あるいは被害軽減の役には立たなくなってきた。このような状況に対応して諸外国はもちろん日本においてもガード フェンスの研究、実験等もさかんに行なわれるようになってきた。すなわち道路を走行中の自動車が進行方向を誤まった場合、道路外（または一方通行の場合は反対車線）への逸脱、暴走を防ぎ、車両を安全、かつ正しい進路方向へ還元させる最も理想的なガード フェンスのタイプと、その際、ガード フェンスと自動車が衝突したとき、双方の損傷をできるだけ少なくするための努力がなされている。このガード フェンスには、それぞれの特長を持った無数の種類がある。

すなわち、ビーム型、ワイヤー型（ケーブル型）に大別されるとはいつても、ビームが鋼製のものや、DAV オートガードのような PC 構造のものもあり、支柱は鋼管（丸型、角型等）や、レール、コンクリート製（PC をふくむ）、木製などがあるほか、網製ビームの中にもその厚さ、断面形状の異なったものなども多い。さらにワイヤー型の場合でも、そのケーブルの使用本数が異なるばかりでなく、その Anchor rods Cable ends, Cables pliers に、それぞれ独特の工夫をこらしたものがあ、しかもパネの構造や、支柱とケーブルの取付方法の異なったもの等、多種多様にわたって製作されている状態である。

このうちガード レールと称せられているガード フェンスは日本においては最も早くから研究され、かつ設置されてきた模様であり、1～2級国道をはじめ、主要地方道等の全国いたるところに設置された最も普及している部類にぞくし、一般的な特質は、ほぼ明らかにされてあるものと解される。従って、ここではガード ケーブルについてその一端を紹介する。

京葉道路に設置のガード ケーブル



ガード ケーブルの二、三の特長

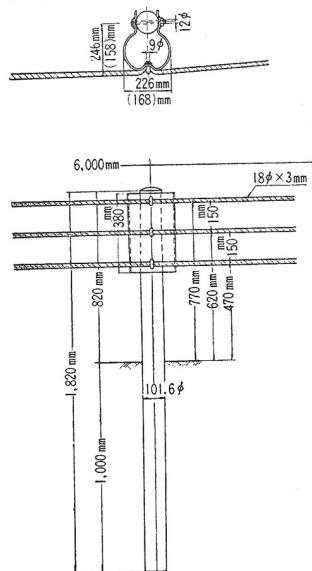
(1) 経済性 一般的にガード ケーブルの方がビーム型のガード フェンスに対して経済的優位性がある。

(2) スピードに対する安全性 原則的には各タイプともそれぞれの特性をもっており安全性の優劣は断じ得ないが、運転者の走行安全感はガード ケーブルが最も少ない。

(3) 除雪に対する容易性 ガード レールならびにオートガード等は積雪の多い地方などでは常に防雪作業の困難性があるものと思われるが、ガード ケーブルはケーブルの間げきより容易に除雪できるので実用的と思われる。

(4) 展望快適性 長距離走行や高速走行は対しては走行圧迫感とも関連して、ガード レールよりガード ケーブルの方に優位性がある。

(5) 修理の容易性 事故衝突後のビームまたはケーブル等の修理に対しては、ガード ケーブルはそのポスト取付部のパネとワイヤーの取りかえ、および中間ポスト、エンドポスト部の初張力の与え方など、部品の交換ないし復旧に相当の複雑性があり、小さい事故を除けば、ガード レールより修理および復旧が困難である。



(6) 支柱の選択性

オートガードと異なりガード レールと同様にその利用目的に順応した強度経済性などを考えて任意に選択しうる。

(7) 維持費の低廉

各製品ともコスト低下にたゆまぬ努力がなされているが、現在のところガード レールよりガード ケーブルの方が設置費用と同じく維持費も低廉である。

以上簡単にガード

ケーブルの特質を述べたが、ガード フェンスとしてのガード レールとともに、将来その設置位置や利用目的に応じて、このガード ケーブルも相当使用されてくるものと思われ、関係技術者の検討が望まれているようである。

【建設省高速道路課 田 辺・記】